

第2回桑名市国際化推進検討委員会 会議概要

| | |
|--------------|---|
| 日時・場所 | 平成29年3月22日(水) 9:30~11:00 桑名市役所本庁舎 3階第二会議室 |
| 出席者 | 委員:4名(1名欠席) 市:5名 事務局:8名 傍聴:0名 |
| 会議次第 | 1. 開会 2. あいさつ 3. 事項 (1) ジュニアサミット開催後の経過報告について (2) 今年度の取り組みと今後について (3) 今後の国際化推進の方向性について 4. その他 5. 閉会 |
| 概要 (主な意見) | 3. 事項 資料1~6の説明を受けて <ul style="list-style-type: none"> ・ジュニアサミット開催後、様々な国際化推進の取組が行われているが、市民の関心がそれほど高くない。PRがうまくいっていない面があるので、いかに市民に知ってもらうかの工夫や研究が必要。 ・市民を巻き込みながら多文化の外国人の人々と国際交流していくことは、市にとっていいことで、その実現に当たり、各活動がしっかりとできているか、必要な内容を十分満たしているかを判断する、客観的な視点が必要。 ・市の発信力に関しては、市独自の発信力も必要だが、ほかと組むという方法があり、市が持っているコンテンツ以外のものと結びつけることも重要。 ・多様性のある社会は、それぞれがその社会で一緒に住まなければならないという、いわば緊張感があり、気遣いがあるので、全体としては居心地のいい面がある。単一的な社会は、その中では心地いいが、なれ合いのようなものが生まれ、他から来た人にとっては違和感を感じたり、居心地が悪く感じたりすることがある。 ・国際交流をやっていくには、特別開かれたまちにしていこうというのではなく、まち自体がそういう国際感覚を持っているように |

していくということが、一つ一つの取組の根底にあるべき。各取組が、きちんと国際感覚に合った形でされているのかが気になる。

- 今後の社会で一番重要なのは、おそらく多様性である。多様性をまちの中に作り、その多様性を理解しながら動いていくことになれば、さっきのある意味でいい緊張感ができて、その社会のきちんとしたルールができてきたり、気遣いができてきたり、まちが成熟した姿になっていく。多様性を理解しながらまちを生かしていくとか、国際的な環境が整っているまちにしていくなとか、国際化が感覚的にわかるようなまちにしていくなが必要。

→多様性の受け入れという点で言うと、海外では、そのときの来訪者の国の国旗を立てている例がある。桑名駅前に、その期間泊まっている方々の国の国旗が立っていると、市としておもてなしの気持ちを表すことができ、市民にもこの人たちが来ているんだと関心を持ってもらえる。来訪した人には、歓迎されていることが伝わる。

→旗がはためいている様子は、空間の演出としても非常によく、その場の雰囲気が変わる。桑名市に着いたときに旗があったら、市に対するイメージが変わるかもしれない。

- 市各課の取組の内容に重なる部分があっても、イベントを実施するときには単独の形になったりする。その辺りをもう少しまくつなげてほしい。横串を刺すような情報が集まってきて、それらを融合したり、組み合わせるような工夫もしてもらえたら。

→そうやって強調し合うことで、取組の質を高めながら効率的に進めることができる。

- 日本人は、海外に行くともものすごく付き合い下手。それは、交流するのは言葉だと思って、まず言葉をきれいに話さなければいけないという思いがあるから。しかし、言葉をいくら流ちょうに話しても、会話が進まなかったら交流にはならない。
- そのときに、普通に人間として付き合えるか、普通に接しているという感覚があるかが、国際交流にはとても重要。会話が続く、成立するのは、フランクに自然体で接しているから。
- 日本の場合は、1対1で身構えて、これを聞かなければいけない、こう話をしようということを準備してしまう。このことを超えられると、国際化都市としての環境が整った、雰囲気が整ったということになる。

| | |
|-----|--|
| | <ul style="list-style-type: none"> ・最も自然に接することができるのは子供たちなので、特に子供たちにその感覚を持ってほしい。もっと自然に海外と接する機会を用意していくことが重要。 ・そのようなことを展開していくコンテンツ作りにおいて、日本人は真面目なので、全部作り込んでしまうが、作り込まない方がいいときもある。例えば、ホームステイの場合でも、手を掛けず、ただ勝手に交流させておいて、同じ人間なんだということに感覚的に気づけば、目の色が違おうが、髪の色が違おうが、子供たちは普通に交流する。 ・桑名市が国際化としてせつかくジュニアサミットを開催したので、全世界の人たちとも普通に接するような子供たちを育て、そういう子供たちが大人になってこのまちを支えていくには、うまく交流できないという壁を越えられる素養を身につけることも必要。 ・各事業は、そういった国際化の素養を養えるようなコンテンツとして成り立っているという観点からも見ていきたい。 ・委員の皆さんの貴重なご意見をいただけたので、それをうまく反映していったきたい。 |
| 担当課 | 市長公室 政策経営課 |